

刊夕日八廿月四

常磐宮日新聞

定額一圓、一ヶ月五圓、三ヶ月十圓、半年二十圓、一年四十圓、郵費五圓
 廣告料五圓、二十圓、五十圓、一百圓、二百圓、三百圓、四百圓、五百圓、六百圓、七百圓、八百圓、九百圓、一千圓、以上各別
 日曜祭日の翌日休刊
 発行所 常磐宮日新聞社
 印刷所 常磐宮日新聞印刷株式会社

瞬間享樂

トニコ 瀧田七郎

2

「田舎つて、變ね」
 「なぜですか?」
 「男と女と二人で居ると、おかしな目で見るんですもの」
 「何も、かまひやしないわ」
 田舎の人なんかどんな目で見つて、田舎の人は頭が古いよね」
 「古いかも知れせんね」
 「だから一所に何時までも居られないわ」
 「よかつたら、あちらの方へ行つて見ませんか?」
 「え、迷惑でなかつたら……」
 「差支へないわ」
 彼女について彼氏も立ち上つた。
 一の公園の噴水の側から七曲りを降りた、二の公園へ登りかけた頃はもう、二人の手は握り合つて居る、二人は抱き合ふ様にして三の公園まで来た、そして鐵道線路に望んだ一番端の暗い所まで来た。
 すると彼女は立止つてハンカチを眼にあて、居る彼氏は彼女の肩へ手をやてつ抱いた、そしていたわる様に……

「どうしたんですか」
 「え? どうしたんですか」
 「あの……妾……」
 「え?」
 「妾……悲しくなつて来たの」
 「何故ですか?」
 「だつて、家でお母さんが死にそうなんですもの」
 「え?」
 「妾……ね、ほんとうは花觀に來たんじやないの、お母さんが死にそうだから……」
 「それで……」
 「彼氏はますます真剣になつて行つた。
 彼女はホロ／＼涙を流した。
 「泣かずに……私でよかつたら、話してくれませんか?」
 「え、そら言はれると嬉しんですけれど……お母さんはもう助かりませんわ」
 「いや、そんな事はない、大丈夫です」
 「い、え、駄目、もう駄目だつて、だつて、眞赤な血を毎日吐くんです、もうだめなの、それに妾、兄弟も親戚もない……」
 「お母さんは肺なんですわ、それで?」
 「妾……妾……悲しくて、悲しくて……」

彼女は一層烈しく涙を流した、身が小鳥の様に微に震えて居る。
 「いつそ、妾もお母さんと一緒に死のうかと思つて」
 「え! 死ぬ!! そんな馬鹿な馬鹿な話があるもんですか私があると上げてあげませう、出來るだけ……微力ですがね」
 「有難うございます、でももうお母さんは助かりませんわ」
 「そんな事ありません、貴女の家まで行きませう」
 「え」
 彼氏と彼女は抱き合つて二の公園まで戻つて來たと、其處にカフェーの出張所めいた店がある、そして邊りは明るい、それに、ドンチャン騒ぎのグループが見物周圍に、幾組もざわめいて居る、カフェーからは「丘を越えて」の湧き立つ様なメロデーが流れ出して來るのだ。
 彼女は彼氏からチョット離れた彼氏は何か物足りない感じがした。
 「あの、妾、一人で歸へりますわ」
 「え?」
 「でないと、家から叱られますから」
 彼女はもう泣いてない、彼氏は眼をキョロツとさせられた

「叱られる? でも、お母さんの病氣?」
 「いえ、なんでもないので、妾もうすつかり朗かになつたの、すみませんでしたわね、怒らないでね、わたし時々、こんな氣持になるのだから怒らないでね、ではさようなら」
 彼女は彼氏の怒りと悲しみと阿保らしさまで歪んだ顔を後にワンスアツプを踊る様に坂を降りて池の方へ行つた。
 どこからか、特別大きいどら聲で佐渡おけさがきこえて來た、三味! 酒! 花! 残された彼氏の頭の上で櫻が二三散つた。
 お! 春なればこそこのナセンス。
 (完)

大塚の 學生靴!!!
 耐久新製品
 編上靴 六〇〇
 半靴 五〇〇
 不安心なるキカイ靴より、安心得る弊店の靴を……

大塚支店製靴部
 電話七七番

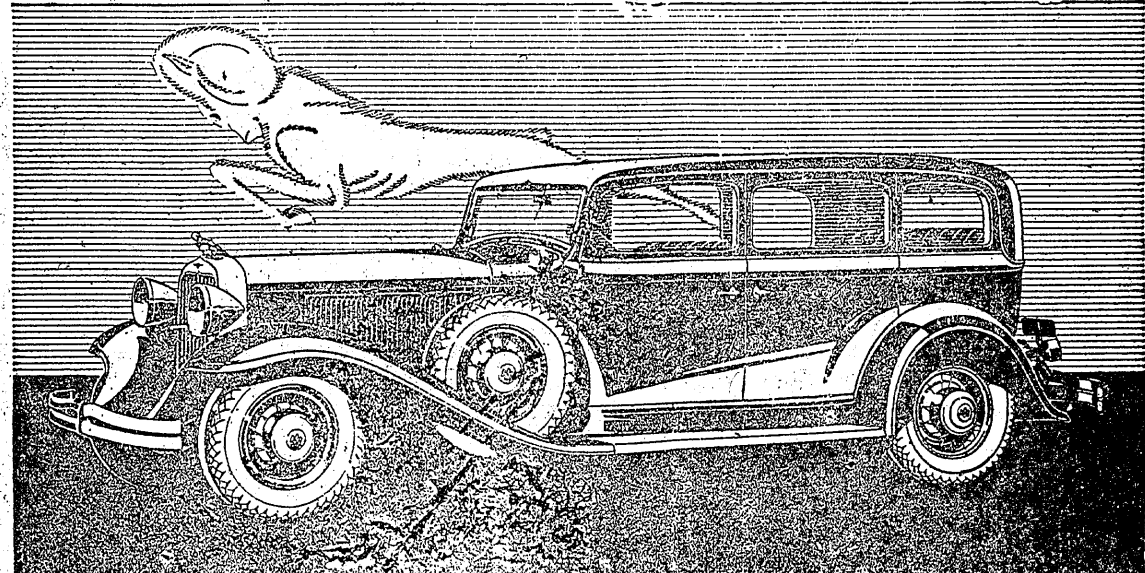
藤沼醫院
 平町紺屋町
 電話七〇五番

DOG E

新車御披露

御國の爲の三勇士三九二タクシー客の爲
 獅子吼の勢で真先に亦も高級車着荷
 一九三二年最新型高級車
 ダツチブラザース號「ウリトラセダン」
 是非御愛乗願ます……。

斯界のナンバーワンは
 三九二タクシーダツチ



平町一丁目 三九二タクシー
 電話 三三九二番
 四四九二番

恩賜の軍刀を拜受した若松大尉

明日平町の時局講演會に
日支事變を語る

平在郷軍人分會にては明廿九日午後六時半から藤田女學校に於て時局講演會を開催し歩兵大尉若松七郎氏の講演ある筈であるが若松大尉は石城郡湯本町出身にて陸軍大學を卒業の際恩賜の軍刀を拜受した有爲の干城として目下參謀本部に於て作戰や動員を取扱ふ第一課に勤務して居る

忠魂碑前に愛國旗懸る

天長節の佳辰を卜し樹立式舉行

平町愛國婦人會委員間では此の程祝祭日等に掲揚すべき愛國旗を製作中であつたが明廿九日午前十時より天長節當日松ヶ岡公園忠魂碑前にて盛大な樹立式を舉行する

表彰産婆

石城郡の分

去る廿七日郡山市に於いて開催された縣下會總會にて表彰された石城郡の分左記十名である

- (平) 鹿崎千代、清野清子、松本せき、猪狩あさ(内郷) 川島とみ(植田) 桑田梅枝(渡邊) 高木まるよ

警女生の通學狀況

警城高等女學校生徒の通學の狀況を調査した結果左の如くである

- 自宅徒歩三七一 自宅汽車三四一 親戚徒歩三〇 親戚汽車一一 寄宿一三 下宿一 自動車四

補助

あり次第直に着手

平町南町裏道路の擴張改修工事は大正二十二年より

第二期の飛躍

産業博覽會

て明廿九日より藝妓の手踊實演や箏筒、白米、蓄音機、自動車、時計其他景品付の福引實探し等各種の餘興を添へる事になつたので本日同事務局員總出で自動車に分乗全郡下に渡つて大宣傳を待つた

理想的温室でメロン栽培研究

三回の收穫を四回に

石城郡神谷農事試驗分場では目下工費五百圓餘にて廿二坪の理想的温室を建設中であるが竣工後は同温室を利用してメロンの栽培を行ふ由因に從來メロンの栽培は一ヶ年に三回行はれるのを普通として居るが今回同場の設備に依つて四回栽培の方法を研究的に行ふ事になつた

佐藤前校長

平町へ寄附

平第二小學校前校長佐藤一氏は今回轉任に際し左の如く寄附した
平女子同窓會へ十圓、同青年團へ十圓、第二校俱樂部へ十圓

糸價安を見越し春蠶掃立手控え

石城地方の春蠶掃立は五月六、七日頃から目下準備中であるが桑葉の發育状態は降雪やら風で禍されて幾分遅れ氣味でありその上糸價が期待した程もなく寧ろ安値を豫想する。ので一般に控目の様で殊に安値を見越して施肥不充分的感あるので掃立を減じなくば桑不足を來す虞あり

桑を買い入れては全然收支の償ふ筈がないのでいづれも尻込みの体にあるので勢ひ昨年度に比し一割五

平映畫界

平 館 松竹ニユース松竹時代劇市川右太衛門大江美智子主演『摺摸の家』日活時代劇河部五郎酒井米子主演『鬼奴岡田良助』松竹現代劇江川宇禮雄田中絹代主演『生活線AB』

糸價安を見越し春蠶掃立手控え

分からの掃立減を見るもの様である

平職業紹介所報告

求人部の部
農夫 三十以下 委細面談(江名町某)
女中 五十前後 尋卒 月五圓位(平町某)
出前持 二十以下 尋卒 給料面談(平町某食堂)
求職の部
郵便配達 十九才 高卒 給料面談(平町某)
看護婦見習 十七才 看 婦學校卒 給料面談(平町某)

募二勇士遺族の

甲慰金

嗚呼忠勇無比の三勇士何ぞ其の壯烈なりしぞ鬼神も爲めに慟哭せむ、實に振古未嘗有驚天動地の偉業にして人生を超越し洋の東西に冠絶す、古今英雄多しと雖も蓋し三勇士に如くものなからん宜なる哉其の心情英雄以上の英雄なり、
今や同胞國を擧げて戦に赴かんとする誰か彼の三勇士に感激せざるものあらむ殊に目下外交は危機に瀕し東亞の風雲彌々急ならむとする秋、内は國民の士氣を鼓舞し外は國家の威武を宣揚する誠に三勇士に負ふ處甚だ大なるを痛感するなり、
名將曰く「吾が皇國も三勇士ありて亡びず」と真に至言にして正に彼を弔ふ最大最高の弔辭なり、
然り彼等三勇士こそ日本軍人の龜鑑にして大和民族發展の尊き犠牲者なり、
吾人は彼等殉國の忠誠を永遠に紀念し併せて千古不磨の英靈を弔はん爲め彼の三勇士遺族へ薄志を饒け以て聊か勇士の靈を慰んとす
愛國の士奮つて賛せられんことを

主唱 阿部政右衛門

後援 常磐毎日新聞社

- 一、弔慰金一人金拾錢均一に願ひます
- 二、右弔慰金は平曙前丸ッ阿部石炭店又は常磐毎日新聞社に御届を乞ふ
- 三、寄附者芳名を常磐毎日新聞紙上に掲載領收書に代ふ

寄附者芳名 第廿六回分

長橋町	宗像アイ	長橋町	宮崎信一
同	同カネ	同	永山忠一
同	同良一郎	堂ノ前	大平泰一
同	同サタ	一丁目	園部武久
同	北川治平	同	同昭雄
同	丹野力藏	同	同英雄
同	大橋ハル	同	濟藤ハツヨ
同	佐藤ヒヂ	同	西脇ヨシエ
同	田中ミサ	同	森田ヨシ
同	加藤ヨシ	同	松崎一郎
同	長谷川シ	同	飯村菊雄
同	安部信	同	同幾子
材木町		同	

不安に脅やかされる

山中の一軒家

山越の失業者に脅迫され

夜もオチく寝られぬと

昨夜八時頃平署に眞真そう
な四十前後の男が出頭し是
非ビストル所持の許可をお
願ひしますと哀願するので
係官が

事情を尋ねると同人
は石城郡箕輪村字高野の山
奥にタツタ一軒の家を構へ
炭焼業を営んで居る金子龍
藏(四)と云ふ者が最近炭
礦方面の失業者や他のル
ンペン等が徒歩で中通りに
山越する際食事や

旅費を要求し断ると
短刀等で脅迫するので夜間
等落付いて寝れぬ故護身用
にビストルを持ち度いのだ
との事で係官に護身法の虎
の巻を傳授され成程ネーと
引下つた

平青年團

總會

來月八日

平町青年團にては來月八日
四丁目マルトモホールに於
て總會を開催する豫定であ
るが當日は決算の承認本年

短銃所持願出

度豫算の編成、役員の改選
をなし退團分團長南町齊藤
英三郎氏外九名に對し感謝
状を贈呈し分團及び各分團
員の表彰をなす筈

昨日の大熱戦

南町分團勝つ

分團對抗野球 試合の決勝戦

既報平町各青年分團對抗軟
式野球の準決勝及び決勝戦
は昨廿七日午後二時より第
一小學校々庭に行はれ南町
五丁目、新川町、胡摩澤、
一丁目の五チームが最後の
接戦を演じ結局決勝戦は南
町、胡摩澤の兩チームとな
り大熱戦の結果七對一のス
コアを以つて南町チーム
が悠々と榮冠を獲り得たが
當日の成績並に優勝南町チ
ームのメンバー左の如くで
ある

準 決 勝
南 町 九A三 五丁目
胡摩澤二二A四 新川町
決 勝

手當金を 石城郡
義勇機へ 江名町
の漁船乗組員八十名は廿六
日より一週間分の手當金の
一部を義勇機「福島號」建造
資金として献金する事とな
つた

轢殺慰藉事件 請求却下

平町搔槌小路鐵道踏切で轢
殺された石城郡平窪村字辰
ノ口松本清作の遺族金太郎
及アイの兩名が鐵道省を相
手取つた慰藉料請求事件は
本日午前十一時平支部にて
請求却下の言渡しあり原告
は直ちに控訴の手續をなし
た

無許可で賣買 石城 郡内郷村字高坂の鈴木クニ エ(三)は本月廿四日古物商 の許可なくして同村字御殿 坑夫長屋四十號の椎根菊治 より衣類六点を買取つた外 數件の賣買をした爲め廿八 日古物商取締違反として平 署に檢舉された

上小川軍人會 石城 郡上小川村在郷軍人分會で は二十七日午後三時より小 學校に總會を開催し廿九日 の天長節當日に於ける催物 に就いて打合せ會を行つた

母親の葬儀に 暇をくれぬ雇主

平町南町常磐亭事谷中ツネ
方の酌婦山形縣谷地町本町
阿部源松の妹キミ(三)は本
月廿日實母が病死し廿八日
葬儀を行ふ故參列せよとの
知らせを受つたので雇主
ツネに暇を願つたが許され
ず實家よりは再參電報ある
に聞入れられぬので本日平
署に實家から雇主の説諭願
出があつた

驛待合室に 捨て兒した男

流浪し廿六日郡山市に至つ
たが子連れのため職にあり
付けず徒方に暮れて廿七日
清子を郡山驛待合室に置い
た儘行衛を晦したので本日

平署へ照會來る

石城郡鹿島村字西島増田清
太郎(三)は昭和五年頃雄太
に出稼中妻トシ(三)及長女
キヨ(三)に先き立たれ七才
の二女清子連れて各地を

明日の天気

今晩は南風
風小雨模様
明日は午後より
晴れ

今晚の部

後六、〇〇(子供の時間)
お話「源義経」中瀬武
後七、三〇趣味講演「劇
化せる千松の死」金徳淳
後八、〇〇 謡曲「鞍馬天
狗」櫻間道雄外
後八、五〇 新講談「幕末
の三傑人(第二席)伊藤
痴遊
後九、三〇(奉天より)
後九、四〇 全國ニュース
氣象通報 番組豫告

明日の部

前八、四〇 氣象通報
前八、四五 天長節觀兵式
狀況 代々木練兵場より
中繼
前九、三〇 奉祝唱歌「君
ケ代 天長節唱歌」女子放
送合唱團
前一一、〇〇 講演
後一〇、〇〇 講演
後一〇、五〇 洋樂の午后
後二、五〇 運動競技一六
大學野球リーグ戦試合狀

窃盗品を入質 遊興中に捕る

石城郡内郷村字高坂居住採
炭夫金法榮(三)は廿六日同
居人たる南光壽(三)所有の
洋服一着及レンコート(時
價三十圓餘)の品を窃取入
質して廿八日遊興中平署員
に取押へられた

月次修養延期 平町

各小學校及其他學校關係者
より成る月次修養會は本日
第三小學校に於て開く筈の
處都合に依り來月上旬に延
期されその日は片倉製菓製
糸工場の見學をなす事とな
つた

平町人專

結婚
△東京府下豊多摩郡淀橋町
字柏木三四三荒井實義氏
(三三)平町材木町四二鈴
木ツタ(三三)
回 死 亡
△紺屋町九大澤キナ(六八)

江戸前料理會

御家庭... 御膳二人以上
松 一人前 圓五品附
竹 同 圓廿錢六品附
梅 同 一圓五十錢七品附
ゼヒ一度御試食下さい
錦 水
電四五四番

幕末剣士

【禁載上演及映畫】

悟道軒 圓玉 演
近藤 紫雲 畫

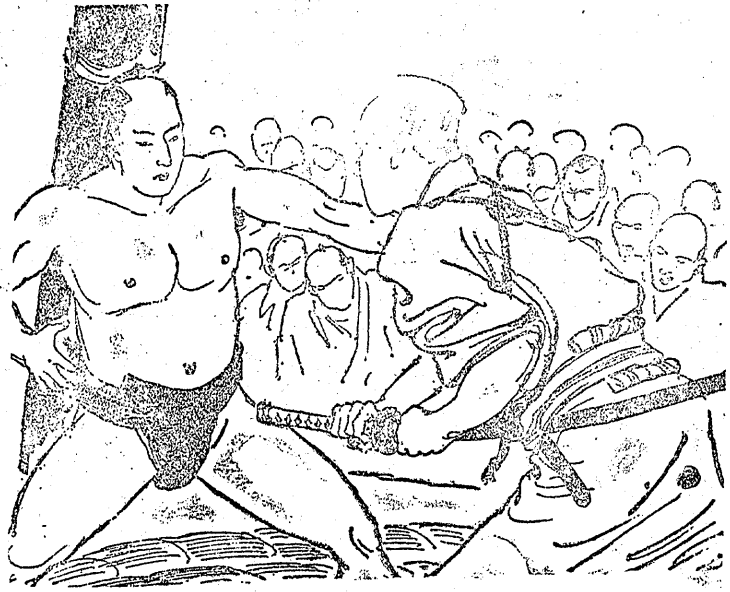
【第卅七席】

神影流の達人秋山要手

五助の敵現はる
櫻井五助は温厚な人物で、勝藏の傍若無人の態度に怒りを發し懲らして遣らうと棧敷を下つて十俵に來たが、この人としては珍らしい事

居る勝といふ三下野郎か」と云つたが五助にしては過激な言葉です
勝「さア一てう取つて遣る」
五「ソレ來イ」分れる時に行司が
作「まア待つて下さい、今

五「勝藏とか申す人、暫らく待ちなさい俺が相手をして遣る」云ひながら衣類を脱ぎ縞子の締込みをして土俵に上つた、勝藏が見ると五尺二、三寸もあううか男として小兵、雪のやうな白い肌、肥ても居ず、さりとて瘦ても居ない、只身體に比較して腕が太いこれは剣術を修行した者として腕は特に發達する、スルト行司が
作「お前さんの名はなんと付けますナ」
五「相撲の名か、さうだナ用心棒とでも申して置け」
作「ヘニ用心棒」
五「さうだ、俺は寄居の虎五郎の許にゐる用心棒だ」
これを聞くと勝藏が
勝「ウーン、虎五郎どのの許に冷飯を食つてゐる櫻井五助といふのはお前か」
五「左様、本名櫻井五助又の名は用心棒貴様は小川の庄兵衛の許にて垢を被せて



名を呼び上げます東西一一方用心棒、此方鐵砲勝まだく〜と云つた、見物はこれを聞いて用心棒と鐵砲との勝負、棒、鐵砲には勝てまい、イヤさうでない、あれは鐵の棒だなどと云ふ者もある、互に仕切つ

たが呼吸合してサツと立ち、ヨイシヨと突き出した勝の鐵砲、五助はそれを受け止めその手を抱き込んで小手を振つた、勝も曲者、それを引ッ外して前袋へ左の手がかゝると、右に上みつを取り引立てやうとしたが五助の身體は土俵に生えたやうに少しも動かない、これは大變と勝は左の足を向ふの内股へ入つて剣先上げやうとした、五助はコレ戲れをするなど云ひながら兩手にて棒を押へてグーと引立てた、其方のある事土俵の中央で引上げてズーツと西の溜の方へ持つて行く是

進み寄り
武「櫻井久々にて面會いたす、拙者は越後高田の浪人にて村上周一郎である、今を去ること三年前、加方十月十七日貴下の爲に伯父伯殿は非業なる死を遂げた此處に面會いたしたるは弓矢武神の加護による處か、イザ尋常に勝負いたせ」と申した五助は聞いて
五「僕は村上周一郎殿か、伯父の仇を討たんとは健氣な行爲なれどこの五助は御身の伯父を害せし覺えはない、我が爲に恥辱を受けそれが爲に腹切つて相果てたは自ら求めし事、拙者を敵と申すは筋違ひなれど、勝負を望まれ辭退いたすは武士道の瑕瑾相手をいたしくれる、イザ參れ」と兩手を擴げて立つた、相手は刀を持つてゐる、櫻井は無刀而も裸體イヤ相撲小屋に居た者は驚いて相撲の後には敵討これほどのものを見ても錢も觀覽料は取らないとはこ

ンと音を立て鐵砲勝は溜へ落ちる、イヤ見物はこれを見たとド〜と動揺めさ渡つた
○「偉いぞー用心棒が勝つたぞ、鐵砲は壊れたぞー」と云ひましたがいヤフ騒ぎ櫻井五助は行司の勝名乗を受けてニコニコ笑ひながら十俵を降りようとした時に
○「櫻井暫く待て」と云ひながら人を押分けて十俵にヒラリと躍り上つたは一人の武家、年の頃は二十三四丈のヌラリと高い色白の美男子、一刀を提げてそれへ

んな安いものは無いと云つた、此時雙方共に鎮まれと聲をかけて十俵に掛け上つたは逸見多四郎
○「小川の先生が出さしつたぞ、これは十分難かしくなつて來たぞ、どんな事になるかと一同の視線は土俵に注ぐ逸見多四郎は騒ぎ立つ人々を制して」
多「如何なる仔細あつて村上殿は櫻井を敵と申されるか、先づそれを承るであらう……」と詰寄つた。

多「如何なる仔細あつて村上殿は櫻井を敵と申されるか、先づそれを承るであらう……」と詰寄つた。

印刷物の御用命
常警日印刷株式會社
電話三六〇番

看護婦急派の求めに應じます
平町南町
平看護婦會
電話三〇七番

難波醫院
平町新川町
【金屋新宅向】
電話五〇二番

専門 内科一般
宅診 内科は何でも診療致します
往診 呼吸器病ばかりではありません
平町南町六五
川井内科診療所
電話一八一番
醫學士 川井重之
女醫 川井安子

柔道衣 新學期特賣！
右調度は品質確實にして斯界に定評ある優良品である
東京警備製柔道衣
京都正春製劍道具
右製品を責任を以て御褒めします
○特 價 ○
柔道衣
前組 一人前 2.70
中組 一人前 3.40
大組 一人前 4.10
劍 道 具
竹筒付 一人前 11.00
竹筒付 一人前 10.80
竹筒付 一人前 10.80
竹筒付 一人前 10.80
特約販賣店
配達敏速
電三九六番
香味本係の本場製柔道衣
召上りませ

花柳科専門
小兒ノかん・むしニあかひき丸堀藥局
平町二丁目
電話三二六

木村外科醫院
入院自炊の便あり
平町五丁目橋際
電話三〇九番